

「綜藝種智院」 試論

古田 榮 作

平安仏教の二大巨星とされる最澄（七六七～八二二）と空海の（七七四～八三五）、二人は、いかなれば仏教という大きな川の住人であった。だが、二人の川の眺め方は、まったくの正反対であった。最澄は川の下に立って川上を眺め、空海は川の上流から下流を眺めていた。^①「最澄の仏教は……凡夫が努力に努力を重ねて、修行によって仏になろうとするものである。

空海の仏教は、……われわれ人間はすべてははじめから仏であるのだから、赤ん坊の仏が大人の仏に成長するようにすればいいのである。いわば仏らしく生きるのが仏教である。」^②とされ、「最澄は本質的にまじめ人間であって、自己のうちにあるマイナス要因を克服しようとする。彼は、それが仏教の修行だと考えていた。

だが、空海は反対だ。空海は、人間のうちにあるプラスの要因を引き伸ばし、発展させようとする。その意味で空海は楽天家であった。^③と見なされることがある。

『續日本後紀』には空海の卒伝として

法師者。讃岐国多度郡人。俗姓佐伯直。年十五就舅從五位下阿刀宿禰大足、読習文書。十八遊槐市。時有一沙門。呈示虚空藏聞持法、其経説、若人依法。讀此真言一百萬遍、乃得一切教法文義諸記。於是信大聖之誠言、望飛焰於鑽燧、攀躋阿波国大瀧之嶽。勤念土佐国室戸之崎。幽谷應声明星来影。自此慧解日新下筆成文。世伝三教論是信宿間所撰也。在於書法最得其妙、與張芝齊名、見称草聖。年卅一得度。延暦二十三年。入唐留学。遇青龍寺惠果和尚。稟学真言。其宗旨義味莫不該通。遂懷法寶歸来本朝。啓秘密之門。弘大日之化、

天長元年任少僧都、七年轉大僧都。自有終焉之志。隱居紀伊國金剛峯寺。化去之時六十三^④と叙述している。しかし『御遺告二十五箇條』では、その冒頭に空海の略伝を掲げているが、それは

初示成立由縁起第一（雖末資從非東寺一阿闍梨以降勿令此遺告寫持守惜如眼肝）

夫以吾昔得生在父母家時。生年五六之間。夢常見居坐八葉蓮華之中諸佛共語也。雖然專不語父母。況語他人。此間父母偏悲字號貴物。（多布度毛能止）年始十二。爰父母曰。我子是昔可佛弟子。以何知之。夢見從天竺國聖人僧來入我等懷。如是任胎產生子也。然則實此子將作佛弟子。吾若少之耳聞喜。以泥土常作佛像。造宅邊童堂。安置彼內奉禮為事。此時吾父佐伯氏。讃岐國多度郡人。昔征敵毛被班土矣。母阿刀氏人也。爰外戚舅阿刀大足大夫等曰。從為佛弟子。不如出大學令習文書立身。任此教言受俗典少書等及史傳。兼學文章。然後及于生年十五入京。初逢石淵贈僧正大師。受大虛空藏等並能滿虛空藏法呂入心念持。後經遊大學從直講味酒淨成。讀毛詩左傳尚書。問左氏春秋於岡田博士。博覽經史專好佛經。恒思我之所習上古俗教。眼前都無利弼乎。一期之後此風已止。不如仰真福田。因作三教指歸三卷。成近士號稱無空。名山絕巖之處。嵯峨孤岸之原。遠然獨向淹留苦行。或上阿波大瀧嶽修行。或於土左室生門崎寂暫。心觀明星入口。虛空藏光明照來。顯菩薩之威。現佛法之無二。厥苦節也則嚴冬深雪被藤衣而顯精進道。炎夏極熱斷絕穀漿。朝暮懺悔及于二十年。爰大師石淵贈僧正召率。發向和泉國槇尾山寺。於此剃除髻髮。授沙彌十戒七十二威儀。名稱教海。後改稱如空。此時佛前發誓願曰。吾從佛法常求尋要。三乘五乘十二部經。心神有疑未以為決。唯願三世十方諸佛示我不二。一心祈感。夢有人告曰。於此有經名字大毘盧遮那經。是乃所要也。即隨喜尋得件經王。在大日本國高市郡久米道場東塔下。於此一部解緘普覽。衆情有滯無所憚問。更作發心。以去延曆二十三年五月十二日入唐。為初學習。天應慰懃載勅渡海。彼海路間三千里。先例至于揚蘇洲無質（云々）而此度般增七百里到衡州多礙。此間大使越前國大守正三位藤原朝臣賀能。作自手書呈衡洲司。洲司披看即以此文已了。如此兩三度。雖然封船迫人令居濕沙之上。此時大使述云。切愁之今也。抑大德筆主呈書（云々）。爰吾作書樣替於大使呈彼洲長、披覽含咲開船加問。即奏長安經三十九箇日。給於洲府力使四人。且給資糧。洲長好問作借屋十三烟令住。經五十八箇日給存問勅使等、彼義式罔極。覽之主客各各流淚。次後給迎客使。給於大使以七珍鞍。次次使等皆給粧鞍。長安入京義式無可說盡。見之者滿於遐邇也。此間大使賀能大夫達向者歸國。惟延曆二十四年電時也。即配大唐貞元二十一年也。爰少僧並橘大夫准勅留學（具在別記）。即少僧遇上都長安青龍寺大德內供奉十禪師惠果大阿闍梨。沐五

智灌頂。學胎藏金剛兩部秘密法及讀毘盧遮那金剛頂經等二百餘卷。並諸新譯經論唐梵合存。少僧以大同二年歸我本國。此間海中人人云。日本天皇崩（云々）聞諫是言尋本口言。船內諸人論爭首尾都不一定。注繫着岸或人言告。天皇某日時崩者。少僧懷悲給素服。從爾以降。帝經四朝奉為國家建壇修法五十一箇度。亦神泉園池邊。御願修法祈雨靈驗其明。上從殿上下至四元。此池有龍王名善如。元是無熱達池龍王類。有慈為人不至害心。以何知之。御修法之此吒人示之。即敬真言與旨從池中現形之時悉地成就。彼現形業宛如金色長八寸許。此金色蛇居在長九尺許蛇之頂也。見此現形弟子等實惠大德并真濟真雅真照堅慧真曉真然等也。諸弟子等敢難覽着。具注言心奏聞。內裏。少時之間。勅使和氣眞繩御弊種種色物供奉龍王。眞言道崇從爾彌起也。若此池龍王移他界。淺池減水薄世乏人。方至此時須不令知。公家私加祈願而已。亦授灌頂者蓋以員多。具不注之。若存灌頂流者自我身始。秘密眞言此時而立。夫師資相傳嫡嫡繼來者。大祖大毘盧遮那佛授金剛薩埵菩薩。金剛薩埵菩薩傳于龍猛菩薩。龍猛菩薩下至大唐玄宗肅宗代宗三朝灌頂國師特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空阿闍梨六葉焉。惠果則其上足法化也。凡勸付法、至于吾身相傳八代也。吾到日彼大阿闍梨曰。我命既盡待汝既尚。已果來。我道東矣。故吳殷纂云。今有大日本國沙門來求聖教。皆令所學可如瀉瓶。此沙門是非凡徒。三地菩薩也。內具大乘心。外示少國沙門相（云々）大阿闍梨御相弟子內供奉十禪師順曉阿闍梨之弟子玉堂寺僧珍賀申云、日本座主設雖聖人是非門徒也。須令學諸教。而何擬被授蜜教（云々）而三般妨申。於是珍賀夜夢降伏。曉旦來至。少僧三拜過失謝言（云々）又去弘仁七年表請紀伊國南山。殊為入定處。作一兩草庵。去高雄舊居移入南山。厥峯絕遙遠阻人氣。吾居住時頻在明神衛護。常語門人。吾性狎山水疎人事。亦是浮雲之類。追年待終為此窟東。太上皇有勅請下。安宿中務供養餘月。還更居高雄。天長皇帝即位任少僧都。再三奏辭不允在公。雖云萬事無違。春秋之間必一往看。彼山裏路邊有女神。名曰丹生津姬命。其社廻有十町許澤。若人到着即時傷害。方吾上登日託巫稅曰。妾在神道望威福久也。方今菩薩到此山妄之幸也。弟子昔現人之時。食國璽命給家地以萬許町。南限南海。北限日本河。東限大日本國。西限應神山谷也。冀也獻永世表仰信情（云々）如今件地中所有見開田三許町。名常庄是也。吾自去天長九年十一月十二日。深厭穀味專好坐禪。皆是令法久住勝計。并為末世後生弟子門徒等之也。方今諸弟子等諦聽諦聽。吾生期今不幾。仁等好住慎守教法。吾永歸山。吾擬入滅者今年三月二十一日寅剋。諸弟子等莫為悲泣。吾即滅而歸信兩部三寶。自然代吾被眷顧。吾生年六十二。臘月四十一。吾初思。及于一百歲住世奉護教法。然而特諸弟子等。念永擬即世也。但弘仁帝皇給以東寺。不勝歡喜。成秘密道場努力勿令他人雜住。非此狹心護眞謀也。雖圓妙法非五千分。雖

廣東寺非異類地。以何言之。去弘仁十四年正月十九日以東寺永給預於少僧。勅使藤原良房卿也。勅書在別。即為眞言密教庭既畢。師師相傳為道場者也。豈可非門徒者猥雜哉。^⑤

と、記述しており、正史である『續日本後紀』と比較をすれば、(1) 出自、(2) 学問の始期、(3) 『三教指歸』著述の時期、(4) 得度の年齢、(5) 逝去時の年齢については異なった記述がなされている。^⑥

空海の就学・遊学は、「年十五就舅從五位下阿刀宿禰大足、讀習文書。十八遊槐市。」と『續日本後紀』が記し、「余年志学。就外氏阿二千石文学舅。伏見廣鑽仰。拉雪蛩於猶怠。怒繩錐之不勤^⑦。」と『三教指歸』が示すように母方の叔父である阿刀宿禰大足から文学を習い、十八で大学に進んだとされているが、『御遺告二十五箇條』では「年始十二。……爰外戚舅阿刀大足大夫等曰。從為佛弟子。不如出大學令習文書立身。任此教言受俗典少書等及史傳。兼學文章。」^⑧然後及于生年十五入京。初逢石淵贈僧正大師。受大虛空藏等並能滿虛空藏法呂入心念持。後經遊大學從直講味酒淨成。讀毛詩左傳尚書。問左氏春秋於岡田博士。博覽經史專好佛經。」とあり、「爰父母曰。我子是昔可佛弟子。以何知之。夢見從天竺國聖人僧來入我等懷。如是任胎產生子也。然則賣此子將作佛弟子」と空海を懷妊した母の夢にしたがって佛弟子になそうとしていたものであり、十二歳で「受俗典少書等及史傳。兼學文章。」と俗典の史傳・文章を学んでおり、十五歳で上京し、後に大学に進み、直講の味酒淨成から毛詩左傳尚書を、岡田博士から左氏春秋を学んだとされている。「大学令」では入学の年齢を「十三以上十六以下」と定めているので、「一九遊聽槐市」と十八歳での入学ためには、学制の変更か空海独自に適用された何らかの事情が存在しなければならぬ。空海の叔父である阿刀宿禰大足は桓武天皇の皇子伊予親王の侍講であり、郷里の国学で修学の後、十五歳で上京し、叔父の縁故を活用して大学の学の門を叩いたと考えるのが無難だろう。そうだとすれば、国学への入学の時期は、「学令」の定める郡司の子弟は十三歳で国学に入学するのを通例とするのに、依ったのであろう。基礎教育を郷里で終え、その上で上京して「貧道幼就表舅頗學藻麗^⑧。」漢詩文を碩学の誉れ高い叔父の阿刀宿禰大足から直々に薫陶を受け、そこで得た学識によって十八歳で大学に入学したのであろう。彼の勉学への態度は「蛩雪繩錐」の語に形容されるような猛烈なものであった。十八歳での大学への進学は異例のことであるが、課役負担の義務の生ずる中男作物の規定と無関係であるとは言いがたい、大学への進学も侍講であった叔父との関係も無視できない。^⑨

こうして勉学の意欲の盛んな空海は、大学で直講の味酒淨成から毛詩、左伝、尚書を学び、明經道博士の岡田牛養から左氏春秋を学んだ

とされ、叔父の「不如出大学令習文書立身」との勧告に従って、立身もしくは官吏への登用につながる明経道を専攻する学科に進んだのである。ところが、「螢雪繩錐」の猛勉強にもかかわらず、官吏への学問にあきたらなかったのか、一人の沙門（『御遺告二十五箇條』では石淵贈僧正大師（『勤操』とされている）と遭遇し、『虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』を呈示され、「空海。從弱冠及知命。山藪為宅。不經人事。禪默為心。不耐煩碎^⑩。」と二十歳には学筵を去って、「飛焰を鑽燧に望み、阿波国大瀧の嶽に攀じ躋り、土佐国室生の崎に勤念す」と俗世界と訣別して深山幽谷で只管修行に励んだと自ら言っている。延暦十六年（七九七）、空海は『三教指歸』を著した。その文章は流麗典雅なりズムに富む四六駢儷体で書かれ、文中には中国の諸古典および仏典の故事来歴、説話文学の類をふんだんに織り込んでおり、三教とは儒教・道教・仏教であり、最初に儒教を紹介し、次いでこれを道教の立場から批判し、さらに道教を仏教の立場から批判して^⑪、仏教の真理が最勝であることを戯曲風に述作したものであり、空海の思想的遍歴を表明するものである。その結末での假名乞児は寫懷頌、觀無常賦、生死海賦を読み上げた後亀毛先生、虚亡隱士、假名乞児の三名の議論の帰結にを次のようにまとめている。

於是龜毛公等。一懼一辱。且哀。且笑。任舌俯仰。逐音方圓。喜歡踊躍。稱曰。吾等。幸遇優曇華之大阿闍梨。厚沐出世之最訓。誰昔未聞。後葉豈有。吾若不幸。不遇和上。永沈現欲。定沒三途。今僅蒙提撕。身心安敞。譬如雷霆發響。蟄蛟開封。朝鳥轉輪。幽闇渙水。彼周孔老莊之教。何其偏膚哉。自今以後。剥皮為紙。折骨造毫。刺血代鉛。曝曬用研。敬銘大和上之慈誨。以充生生之航路。

假名曰。復座。今當敝三教。以十韻之詩。代汝等之謠諑。乃作詩曰。

居諸破冥夜	三教褰癡心	性欲有多種	醫王異藥鍼
綱常因孔述	受習入槐林	變轉聃公授	依傳道觀臨
金仙一乘法	義益最幽深	自他兼利濟	誰忘獸與禽
春花枝下落	秋露葉前沈	逝水不能住	迴風幾吐音
六塵能溺海	四德所歸岑	已知三界縛	何不去纓簪 ^⑫

三教褰癡心と位置付けながらも、孔子に因む三綱五常を説く儒教は、それを修めることすなわち入槐林により三公九卿の地位に達すると官職への学問にはかならないと喝破し、「道生一。一生二。二生三。三生萬物。萬物負陰而抱陽。沖氣以為和。……」^⑬と「道が『一』すなわ

ち一氣を生じ、一氣が分かれて『二』すなわち陰陽の二氣となり、陰陽の二氣が交合して、陰陽の二氣とともに『三』とよばれる冲和の氣となり、その三とよばれる冲和の氣が万物を生じる。したがって万物はそれぞれに陰の氣を背負い、陽の氣を抱えこみ、冲和の氣によって調和を保っているのである^⑮と説く老子の教えは道觀への登樓へと導くとしながら、大乘仏教の教えは「義益最幽深 自他兼利濟」とするのである。この認識が深山幽谷での勤念へと導いたのである。

『三教指歸』の執筆は、佛道への道へと進む決意表明をドラマティックに描き出したものである。こうして仏教に帰依し、その道を修めようととして阿波国大瀧の嶽や土佐国室戸の崎での修行となったのであろう。こうした深山幽谷での私度僧としては七年の間の修行中は、空海は都から忽然と消え去り、その様相を知る手がかりはない。だが、気がかりなことは、何時得度を受けたのであろうか。『續日本後紀』は入唐直前の三十一歳としているが、『御遺告』では「朝暮懺悔及于二十年。爰大師石淵贈僧正召率。発向和泉國槇尾山寺。於此剃除髻髮。授沙彌十戒七十二威儀。」と授戒者を大師石淵贈僧正すなわち勤操とした上で二十歳での得度としている。空海の得度については太政官符が重要な史料となる。

□政官符

治部省

□学僧 空海（俗名讃岐國多度郡方田郷 戸主正六位

上佐伯直道長戸口同姓眞魚）

右去延暦廿二年四月七日出家□□□

□承知□□度之符到奉行

□五位下□左少辨藤原貞副 左大史正六位上武生宿禰眞象

延暦廿四年九月十一日^⑯

この史料を、欠損部分を補って読めば「太政官符 治部省 留学僧空海（俗名讃岐國多度郡方田郷 戸主正六位 上佐伯直道長戸口同姓眞魚）右去る延暦廿二年四月七日出家入唐者 省、宜しく承知し、例に依つて之を度すべし 符到らば奉行せよ 從五位下守左少辨藤原貞副 左大史正六位上武生宿禰眞象 延暦廿四年九月十一日」となるとされ、もし彼の生年を寶龜四年（七七三）とすれば、三十一歳となり、

『續日本後紀』の記述が正しいことになる。とすれば、『御遺告』の二十歳得度説は、私度僧として出家したことをもって得度とみなしたのであろう。山岳幽谷での修行を得度の上でなしたとするものであろう。

時を経て、桓武天皇は藤原葛野麻呂を大使とし、石川道益を副使とする遣唐使の派遣を決定した。（遣唐使一行の中には還学僧として最澄や留学生橘逸勢も含まれていた。）空海は「奉為四恩造二部大曼荼羅願文」で「弟子某。性熏觀我。還源為思。徑路未知。臨岐幾泣。精誠有感。得此秘門。臨文心昏。願尋赤縣。人願天順。得入大唐。」^{①⑦}と入唐留学の目的を「得此秘門」としており得度の上、機会を待っていた。延暦二十二年（八〇三）に出帆したこの遣唐使節団は暴雨疾風に遭って遭難し、留学生の二次詮衡が行われ、空海の入唐留学が実現することとなる。翌年再出帆した大使藤原葛野麻呂らの遣唐使節団には第一船に大使や空海ら、第二船には最澄が乗り込んだのである。「為大使與福州觀察使書」では「賀能等。忘身。銜命。冒死。入海。既辭本涯。比及中途。暴雨穿帆。戕風折柁。高波沃漢。短舟齧々。凱風朝扇。摧肝耽羅之狼心。北氣夕發。失膽留求之虎性。頻蹙猛風。待葬鼉口。攢眉驚汰。占宅鯨腹。隨浪昇沈。任風南北。」^{①⑧}と遭難漂流の様子を描写しており、「與福州觀察使入京啓」と題される書状では「日本国留學沙門空海啓。空海才能不聞。言行無取。但知。雪中枕肱。雲峯喫菜。逢時乏人。遙留學末。限以廿年。尋以一乘。任重人弱。夙夜惜陰。今承。不許隨使入京。……」^{①⑨}と謙虚に「才能不聞」「逢時乏人」「任重人弱」とか述べてはいるが、「遙留學末」と期限二十年の留学生として派遣されたのであり、その目的である「尋以一乘」のために「夙夜惜陰」と決意を表白しているのであり、そのために入京の許可を強く求めたのである。彼の謙遜にもかかわらず、この遣唐使藤原葛野麻呂一行の「為大使與福州觀察使書」の筆者は空海であり（大使藤原葛野麻呂の秘書の役割も帯びていたと推測されている）、暴風雨に遭い漂流して文契印書を携行せず、僻南の地赤岸鎮の海岸に漂着した一行はかの地で五十余日の滞在を余儀なくされたが、一行の危機を救い、入京への道を開いたのは空海の文書であったことは疑いない。（「為大使與福州觀察使書」では「……大唐之遇日本也。雖云。八犬狄雲會。膝步高臺。七戎霧合。稽顙魏闕。而於我國使也。殊私曲成。待以上客。而對龍顏。自承鸞綸。佳問榮寵。已過望外。與夫瓊々諸蕃。豈同日而可論乎。又竹符銅契。本備奸詐。世淳人質。文契何用。是故。我國淳樸已降。常事好隣。所獻信物。不用印書。所遣使人。無有奸偽。相襲其風。于今無盡。加以。使乎之人。必擇腹心。任以腹心。何更用契。載籍所傳。東方有國。其人懇直。禮義之鄉。君子之國。蓋為此歟。然今。州使責以文書。疑彼腹心。檢括船上。計數公私。斯乃。理合法令。事得道理。官吏之道。實是可然。雖然。遠人乍到。觸途。多憂。海中之愁。猶委

胸臆。徳酒之味。未飽心腹。率然禁制。手足無厝。又建中以往。入朝使船。直着楊蘇。無漂蕩之苦。州縣諸司。慰勞慇懃。左右任使。不檢船物。今則。事與昔異。遇將望疎。底下愚人。竊懷驚恨。伏願。垂柔遠之惠。顧好隣之義。從其習俗。不怪常風。然則。涓々百蠻。與流水而朝宗舜海。喁々萬服。將葵藿。以引領堯日。順風之人。甘心輻湊。逐腥之蟻。悅意駢羅。今不在常習之小願。奉啓。不宣。謹啓。」と恒例なら文契を携行するのに嵐のため携行していないし、船中検査も礼義に反するとして拒絶しながら長期の友好関係と礼義の国日本を信用して上客として待遇することを強く求めている)

やつのことで、入国・入京を許された一行はその年の暮れに「三江泛鰲。五嶺馳騏^①」と水陸兩路を使って長安に到着する。外交の慣習として皇帝徳宗に拝謁する手筈であるが、徳宗の病重篤のためになかなかつたが(翌年早春に薨去)、大使に帰国の許可が出るのは二月になってからのことであり、この期間に詩文・書跡を収集し「余於海西。頗閑骨法。雖未畫墨。稍覺規矩^②」と書法を習得し、筆墨の製造法までも学んでいた。大使一行が帰国の途に就くや居を延康坊の西明寺に定め、西明寺在住の僧である圓照ばかりでなく、慧琳、青龍寺の惠果、醒泉寺の般若三蔵、牟尼室利三蔵、景浄らと出会い、教えを受けたり、友誼を結んだりしている。(慧琳は疎勒国人、すなわちサマルカンド人であり、景浄はペルシヤ系の人であり『大秦景教流行中国碑頌』を撰述したとされ、景教への造詣は深かった。世界の鏡とされる長安の都でまさに国際的な交流を深めていたのである)そして青龍寺の惠果にしたがって貞元二十一年(八〇五)六月上旬に学法灌頂壇に入り、七月上旬には金剛界曼荼羅の灌頂を受け、八月には傳法阿闍梨位の灌頂を受けた。(学法灌頂の際も金剛界曼荼羅の灌頂の際でも、投華得佛で華が中台大日如来に着座した、のを惠果は賛嘆したという)惠果は空海に傳法の印信として a 佛舍利八十粒(金色のもの一粒を含む)、b 刻白檀佛菩薩金剛等像一龕、c 白縹大曼荼羅四百四十七尊、d 白縹金剛界三昧耶曼荼羅尊百三十尊、e 五寶耶金剛一口、f 金剛鉢子一員、g 牙床子一口、h 白螺貝一口を授与し、更に自ら使用していた衣鉢五種(a 健陀穀子袈裟一領 b 碧瑠璃供養鉢二口 c 琥珀供養鉢一口 d 白瑠璃供養鉢一口 e 紺瑠璃箸一具)を付与している。^③空海は文字通り惠果の衣鉢を継いだのであるが、「如今此土縁盡不能久住。宜此兩部大曼荼羅。一百余部金剛乘法。及三蔵轉付之物。並供養具等。請歸本鄉流轉海内。纔見汝來恐命不足。今則授法有在経像功畢。早歸郷以奉国家。流布天下。増着生福。然則四海泰萬人樂。是則報佛恩報師徳。為国家忠也於家孝也。義明供奉此處而傳汝其行矣。傳之東国。努力努力。」^④という『遺誠』を与えた。この惠果の『遺誠』が空海に早期帰朝の決意をさせる。新帝への拝謁のために

派遣された遣唐判官高階真人遠成に帰国を申請し(「與本國使請共歸啓」²⁵)、越州で経論を蒐集した上で、遣唐判官高階真人遠成、留学生橘逸勢らとともに元和元年(八〇六)に帰国の途についた。在留年限二十年の留学僧として入唐しながら、僅か三年足らずの滞在で帰国の途についたのである。

長安で惠果阿闍梨から灌頂を受け、多岐にわたる文物を収集して帰朝した空海は、同船した遣唐判官高階真人遠成に託して、朝廷に『請来目錄』を献上した。その内容は二一六部四六一巻の密教經典、仏像、曼荼羅など一〇舗、道具九種などであった。弘仁元年(八一〇)十一月一日より、高雄山寺で、帰朝後初めての、国家鎮護のための修法を行い、翌二年には東大寺別當職に任ぜられ、『書劉希夷集獻納表』(弘仁二年六月)、「奉獻雜書迹狀」(同年八月)などにより嵯峨天皇と親交を深め、また乙訓寺別當にも任ぜられている²⁶。弘仁三年には金剛界灌頂と胎藏灌頂を行い、最澄に灌頂を授けたのである。かつては足元にも近寄りがたかった最澄が、空海が朝廷に献上した『請来目錄』を見てその借用を願い、二人の間の交際が始まったが、最澄の高弟の泰範が空海の許に走り、又最澄の『理趣釋經』その他の經典の借用の申し入れを空海が拒否したことで二人の交際は疎遠になる²⁷。最澄との関係が疎になる一方で、空海は南都学匠と親交を重ね、南都仏教に思想的影響を与えるようになっていた。

弘仁七年(八一六)六月、空海は「於紀伊国伊都郡高野峯被請乞入定處表」²⁸を提出した。「孤岸奇峯。觀世之蹤相續。尋其所由。地勢自爾。」ので釋迦が衆生を済度したという補陀落迦山の記事に因み、深山幽谷は觀世音の靈驗が続いているとして、佛道を継承しようとする者の修行は、巷の雜踏を離れた、懸隔の地こそが理に適っているし、「又有臺嶺五寺。禪客比肩。天山一院。定侶連袂。是則、国之寶。民之梁也。」と中国の山西省五台五つの名刹があり、座禪修行するが多勢集い天台大師智顗の開山した国清寺の一院には禪定をする僧侶がひしめいているが、こうした仏道を極めようとして修行に励む者は国家に有用な人材(「国寶」)であり、民を救済する梁であるとしているのに因んで「深山平地。尤宜修禪」として「少年日。好涉覽山水」「四面高嶺。人蹤絕蹊」の高野山に「今思。上奉為國家。下為諸修行者。芟夷荒蕪。聊建立修禪一院」²⁹と真言密教の修行の根本道場の建立のための土地を国家から賜りたいと願っていたのである。少年の日から慣れ親しんだ高野山に弟子の觀法道場を求めたのである。この願いはすぐに勅許され、弘仁十年には伽藍建立が着手された。

下って弘仁十四年(八二三)には嵯峨天皇より空海に東寺が給預された。官寺であり、京都に座する東寺は以後鎮護國家の根本道場とし

て位置づけられる。雑踏の賑わいは佛道修行には適しているとはいい難いものであるが、宮城にほど近い、都の南端に位置することは、国家鎮護の祈禱には有益であり、その面での効用を果たそうとしたのであろう。空海は宗教的修行にとどまらず、「済生利民」に努め、讃岐の満濃池の修築に代表される治水活動を献身的に行なったのである。

天長五年（八二八）年には藤原三守の邸宅の一部が提供されて、東寺の東隣に綜藝種智院が開設される。その創立の意図を空海自身の筆である「綜藝種智院式并序」に見てみよう。「綜藝種智院式并序」の前文は次のようである。

辭納言藤大卿。有九條宅。地餘貳町。屋則五間。東隣施藥慈院。西近眞言仁祠。生休歸眞之原迫南。衣食出内之坊居北。涌泉水鏡而表裏。流水汎溢而左右。松竹風來雨琴箏。梅柳雨催錦繡。春鳥啼聲。鴻雁于飛。熱渴臨也即除。清涼憩也即至。兌白虎大道。離朱雀小澤。緇素逍遙。何必山林。車馬往還。朝夕相續。貧道。有意濟物。竊庶幾置三教院。一言吐響。千金即應。永捨券契。遠期冒地。不勞給孤之敷金。忽得勝軍之林泉。本願忽惑。樹名曰綜藝種智院。試造式記曰。若夫、九流六藝。濟代之舟梁。十歲五明。利人之惟寶。故能。三世如來。兼學而成大覺。十方賢聖。綜通而證遍知。未有。一味作美膳。片音調妙曲者也。立身之要。治國之道。斷生死於伊陀。證涅槃於蜜多。弃此而誰。是以。前來聖帝賢臣。建寺。置院。仰之弘道。雖然。毗訶方袍。偏翫佛經。槐序茂廉。空耽外書。至若三教之策。五明之簡。擁泥不通。肆建綜藝種智院。普藏三教。招諸能者。所冀。三曜炳者。照昏夜於迷衢。五乘竝鑣。駟群竝覺苑。或難曰。然猶。事漏先覺。終未見其美。何者。備僕射之二教。石納言之芸亭。如此等院。竝皆有始無終。人去跡穢。答。物之興廢必由人。々之昇沈定在道。大海資衆流。以致深。蘇迷待積塵而為高。大廈群材之所支持。元首股肱之所扶保。然則。多類者難竭。寡偶者易傾。自然之理使然。今所願者。一人降恩。三公勳力。諸氏英貴。諸宗大德。與我同志。百世成繼。難者曰。善也。或有人難曰。國家廣開庠序。勸勵諸藝。霹靂之下。蚊響何益。答。大唐城。坊々置閭塾。普教童稚。縣々開鄉學。廣導青衿。是故。才子滿城。藝士盈國。今是華城。但有一大學。無有閭塾。是故。貧賤子弟。無所問津。遠坊好事。往還多疲。今建此一院。普濟童蒙。不亦善乎。難者曰。若能果如此。盡美盡善。與兩曜爭明。將二儀競久。益國之勝計。利人之寶洲。余雖不敏。投一簣乎九仞。添涓塵乎八挺。報四恩之広徳。為三点之良因。^③

「綜藝種智院」創立の由来を前中納言藤原朝臣三守から提供された、左京九条の邸宅を唐の都である長安の坊々に置かれた閭塾（＝学校）

に倣って、「貧道。有意済物。竊庶幾置三教院。」と「三教院」（儒教・道教・佛教を教授する学校）の設立、すなわち「綜藝種智院」の創設を建て、三教にとどまらず、幅広く諸々の學術・技芸を衆庶に習得させることを目的としている。衆庶を教育することで、「才子滿城。藝士盈國」の状態が生まれ、「益國之勝計。利人之寶洲」となることを願うのである。彼は佛教に帰依しながらも、「兼學而成大覺」と佛教者としての深い悟りに佛教以外の典籍などの学習は必要だと捉え、「九流六藝。濟代之舟梁。十藏五明。利人之惟寶」とあらゆる思想・學問・技芸の伝授の必要性を説き、個々人の素質を考慮すれば、「未有。一味作美膳。片音調妙曲者也」と特定の學問だけの学習を強要することは、たとえそれが、佛教であつても、有効ではないとする。京師に大学のみがあるという状態では、育つべき人材も十分には育たないとするのである。換言すれば、私的な学校を設立し、その門戸を広く庶民に開放することで、国や郷に才人・能者が充ち、そのことが国家の繁栄に結びつくとするものであり。教育機会の拡大（『庶民への学習の途の開放』を試みようとするものである）。

更に、先覺者の試み（吉備真備の二教院も石上宅嗣の芸亭）は、幅広い支持者の欠いたために衰微したとし、天皇をはじめ公卿・官の支持を期待している。（吉備真備の二教院については、詳しい資料がなく、佛・儒の二教を教授した私立学校であることだけが知られているにすぎない。しかし、『続日本紀』には「入唐留学生從八位下下道朝臣真備、獻唐礼一百卅卷、大衍曆經一卷、大衍曆立成十二卷、測影鉄尺一枚、銅律管一部、鉄如方響、寫律管声十二条、樂書要録十卷、絃纏漆角弓一張、馬上飲水漆角弓一張、射甲箭廿隻、平射箭十隻⁵⁴」とあり、礼書・曆書・樂書を献上し、その上測量器具・樂器・弓矢をも献上している。書については、唐礼・大衍曆經・大衍曆立成・樂書要録ばかりでなく史書も将来したとされているのである。真備は後に正六位下を授けられ大学助となり、学生四百人をして「五經・三史・明法・算術・音韻・籀篆等の六道」を学ばせしめたとされており、大学寮の明經・文章・明法・算・書の六道すべてに亘って彼（『真備』）の新知識が取り入れられて伝授されたとされている。すなわち吉備真備の二教院は儒・佛の二教にとどまらず、広く六道をも教えていたとされるのであり、また芸亭については、『後日本紀』に「大納言正三位兼式部卿石上大朝臣宅嗣薨。詔贈正二位。宅嗣、左大臣從一位麻呂之孫、中納言從三位弟麻呂之子也。性朗悟有姿儀。愛尚經史、多所涉覽、好属文、工草隸。勝宝三年、授從五位下、任治部少輔。稍遷文部大輔、歷居内外。景雲二年至參議從三位。宝龜初出為大宰帥。居無幾遷式部卿、拜中納言。賜姓物部朝臣。以其情願也。尋兼皇太子傳。改賜姓石上大朝臣。十一年、転大納言、俄加正三位。宅嗣辭容閑雅。有名於時。每值風景山水、時援筆而題之。自宝字後、宅嗣及淡海真人三船為文人之

首。所著詩賦數十首。世多伝誦之。捨其舊宅、以為阿閼寺。々内一隅、特置外典之院。名曰芸亭。如有好学之徒、欲就閱者恣聴之。仍記条式、以貽於後。其略曰、内外両門本為一体。漸極似異、善誘不殊。僕捨家為寺、帰心久矣。為助内典、加置外書。地是伽藍。事須禁戒。庶、以同志入者、無滯空有、兼忘物我、異代來者、超出塵勞、帰於覺地矣。其院今見存焉。臨終遺教薄葬。薨時、年五十三。時人悼之。⑤との石上宅嗣の薨傳に「如有好学之徒、欲就閱者恣聴之。」とした上で、その主要な規則に「内外両門本為一体。漸極似異、善誘不殊。僕捨家為寺、帰心久矣。為助内典、加置外書。地是伽藍。事須禁戒。庶、以同志入者、無滯空有、兼忘物我、異代來者、超出塵勞、帰於覺地矣」と佛道の佛教の立場から、「為助内典、加置外書」とした上で「庶、以同志入者、無滯空有、兼忘物我、異代來者、超出塵勞、帰於覺地矣」と佛道に帰依する者は下典も修学することで「覺地」に帰せんことを望んでいるのである。すなわち、佛道の真理を最高の真理としながらも、そこに到着するために諸々の学問の修学を認めたのであり、また遣唐副使として唐の實際の教育制度を見聞した体験が、私的な教育機関の設立に向かわせ、「如有好学之徒、欲就閱者恣聴之。」と好学の徒であれば、蔵書の閲覽と聴講を認めており、その門扉を開放していたことは、そのことが庶民にまで適用されていたかどうかはともかく、延暦元年（七八二）に大学の別曹として和氣広世が大学の南邊の私宅に内外の經書を数千卷蔵する、弘文院を置き、壘田四十町を学料に充て、一族の大学教育の充足を図ったり、菅原清公・菅原是善・大江音人らによつて延暦末年に建立された文章院は直曹であり、年齢を問わず、大学に在籍する一門の者に儒学を修学させるものであり、藤原冬嗣が弘仁十二年に設立した勸学院は一族の子弟で、大学に遊学する者の為のものであり、遠隔地出身者、貧窮者を対象としており、好学の士であればその出自を問わず、蔵書の自由閲覽を認めたり、自由聴講を認めたりするものではなく、あくまでも一族郎党の勸学のための宿泊施設・修学施設として、蔵書を備えた施設を準備したのであり、その門戸を開放するには到らなかった。これらの私立学校、すなわち家塾が、それを支えるために「勸学田」をもち、「勸学田」からの収益を学生の生活の保障、修学費用に充てたことから、「綜藝種智院」の維持のために「勸学田」を準備していることにつながっている。就学機会の拡張、換言すれば、衆庶にいたるまでの教育機会の保障は、郡司の一族として、例外的に、大学への進学を認められた、空海の独自性であるといえるものである。就学の道を広く衆庶に開放し、多才有能な人士が巷に溢れることが国の、郷の繁栄につながるとするものである。

この「綜藝種智院」創設構想は、空海の留学僧としての長安での見聞・体験から生まれたものであろう。長安の町を散策し、閭塾の多さ

に驚き、それが唐・長安の繁栄の姿であると認識し、また国際人としてサマルカンド人やペルシャ系の人士と親しく交際したことで、学問が大学・国学で学ばれている儒教だけではないことを鋭く見抜いていたのである。偶々、叔父が皇太子の侍傳でもあり、讃岐の佐伯一族の出自であることから、大学に進むことができた空海が、同様の素質を持ちながらも、縁故なく、地位なきが故に学問の道を断念した数多の庶民の姿が脳裡から離れなかったであろう。それゆえにこれほどまでに庶民の学習の機会の設定を強く望んだのであろう。

招師章

語曰。里仁為美。擇不處仁焉得知。又曰。遊於六藝。經云。初阿闍梨兼綜衆藝。論曰。菩薩為成菩提。先於五明處求法。是故。善財童子。巡百十城。尋五十師。常啼菩薩。常哭一市。切求深法。然則。得智在仁者之處。成覺資五明之法。求法必於衆師之中。學道當在衣食之資。四者備而然後有功。是故。設斯四緣。利濟群生。雖云有處有法。若无師者。若由得解。故先請師。々有二種。一道。二俗。道所以傳佛經。俗所以弘外書。眞俗不離。我師雅言。

一 道人傳受事

右頭密二教。僧意樂。兼通外書。任住俗士。有意樂學内經論者。法師心住四量四攝。不辭勞倦、莫看貴賤。隨宜指授。

一 俗博士教受事

右九經九流。三玄三史。七略七代。若文。若筆等書中。若音。若訓。成句讀。或通義。一部一帙。堪發童蒙者住。若道人意。樂外典者。茂士孝廉。隨宜傳授。若有衿黃口。志學文書。絳帳先生。心住慈悲。思存忠孝。不論貴賤。不看貧富。隨宜提撕。誨人不倦。三界吾子。大覺師吼。四海兄弟。將聖美談。不可不仰。

一 師資糧食事

夫人非懸瓠。孔丘格言。皆依食住。釋尊所談。然則。欲弘其道。必須飯其人。若道。若俗。或師。或資。有心覺道者。竝皆須給。雖然道人。素事清貧。未辨資費。且入若干物。若有意益国利人。志求出迷證覺者。同捨涓塵。相濟此願。生々世々。同駕佛乘。共利群生。天長五年十二月十五日。大僧都空海記。⁴⁰⁾

招師章には前書きが添えられ、諸学の兼修が法を求めることにつながるとし、「得智在仁者之處。成覺資五明之法。求法必於衆師之中。學

道當在衣食之資。」と智を得るために處・法・師・衣食の資が必要条件だとし、その条件が整ってこそ効果がみられ、「利濟群生」が可能となるし、多くの師を求めるためには僧俗の能者を招くべきであるとした上で、道人傳受事、俗博士教受事、師資糧食事の三箇条を掲げている。

道を求めることを学ぶばかりでなく、広く諸藝・諸學を兼修することを説くばかりでなく、學業成就のために、環境・教えるべき真理・選び抜かれた師・生活の資の保障という四条件を必須条件と位置づけていることは注目に値しよう。

彼が三箇条として特筆した第一は「道人傳受事」は佛教を真摯に学ぼうとする者のために、慈・悲・喜・捨と布施・愛語・利行・同事に徹して労苦を厭わず、学習者の貴賤を問わず、指導すべきであるとする。清廉な僧が後進の育成の楽しみをもって指導すべきであるとするのである。

第二箇条の「俗博士教受事」は兼修を奨励するために俗人の教師を招聘するが、易・書・詩・礼記・春秋左氏傳・孝經・論語・孟子・周礼の九經、儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縱横家・雑家・農家の九流、老子・莊子・周易の三玄、史記・漢書・後漢書の三史、輯略・六藝略・諸子略・詩賦略・兵書略・術教略、方技略の七略、晋書・宋書・齊書・梁書・陳書・周書・隋書の七代史、詩賦または銘賦、音声学(中国語、すなわち唐音の発音)、その意味、句讀の仕方等を教示すべきであり、童蒙の理解力を超えないよう指導すべきであり、少年や学生が学習しようとするならその希望を叶えてやるべきであり、佛教への道を強制すべきではないとしている。ここでは多方面の學藝の教授と学習者の学習意欲に即した指導、学習者の学習能力に応じて指導すべきだとしている。

第三箇条の「師資糧食事」では、學業持續のためには生活費に憂いがあるが、師であれ、学習者であれ、生活費は給与すべきであるとするのである。そのために天皇・公卿から寄進された「勸學田」からの収益を充てようとするのである。教師への給与ばかりでなく、学習者への給費は特筆されるべきである。給費制の奨學制度を構想しているのであり、生活が保障されることで師弟ともども學問に没頭できるという状況を作り出そうとしているのであり、先に掲げた佛道を本道としながらも諸家の思想・あらゆる學問の學習を可能にし、後顧の憂いなくこの師弟が共にその道を極めようとする一つの共同体的なものを構想していたのではなからうか。とすれば、この「綜藝種智院」は學問への志を同じくする者の極めて高邁な側面をも持たせようとしていたのではなからうか。

「綜藝種智院」は、経済上の理由と優れた教師を確保できなくなつて、承和十二年（八四五）閉校となり、東寺に施入された。だが、この学校は、庶民を含む学問を愛好する者にその門戸を開き、佛教のみならず諸家の思想、六藝をはじめとする技芸、歴史・詩賦、軍事、数学をはじめとする諸学を教え、学習者の理解を引き出そうとする教育方法を採用し、学習者・教師が生活の憂いなく指導・学習に没頭・邁進するための給費制度の構想は、庶民への学習機会の拡張の願いに根ざすものといえる。

純真な最澄が「寶」を育成するために、「山家学生式」を定めて、国家の寶たる僧侶、それも、一乗の僧侶の育成に努めたのに比し、「綜藝種智院」は衆庶にも開かれ、あらゆる学芸の習得を目指すものであった。才人・藝士・能者が国・街にあふれ、その才智が国家をよき道へと導くとし、「済生利民」の思想に根ざすものといえよう。だが、理念が先行し、時の「文化・経済状況」を無視した試みは、二十年にも満たない歴史に幕を閉じてしまったのである。

註

① ひろ さちや著『陰と陽——最澄と空海』（ひろ さちや著『日本仏教の創造者たち』五〇頁）ひろ氏はこの言及に先立って「ライヴァル」の語義について考察している。英語の“rival”はラテン語の“*rivallis*”に由来し、「同じ川の水を共通に使う人といった意味である。だからライヴァルは『近隣の人』であるが、とかく近所の人間は反目しがちであつて、そこで「ライヴァル」が『競争相手』になった次第。しかし、「ライヴァル」は基本的に『同じ川の水』を使っているという意識があることを忘れてはならない」（同書 四九頁）として、日本の仏教史における最大の「ライヴァル」として最澄と空海と挙げている。今、研究社の大英和辞典、Oxford English Dictionary, New Standard Dictionary of English Language (First Edition) でその語義（名詞）をみると、

A 研究社 大英和辞典（第五版）では、

語源をラテン語の *rival*-(is) on the same stream とフランス語の *rivus* stream としており、その語義を

原義 one who uses the same stream with another

a 競争者・敵手・対向者

b 肩を並べる人・匹敵者

c (質的に) 匹敵するもの、肩を並べるもの

d (廃語) 同僚、相棒

としているが、

B OED (Second Edition On compact disk) の中

n₁ Obs. ヲノ

① A bank, shore, landing-places

② Landing; arrival at a port

n₂ ad. L. *navalis*, orig. one living on the opposite bank of a stream from another, f. *navis* stream

① one who is in pursuit of the same object as another; one who strives to equal or outdo another in any respect

② one who, or that which, dispute distinction or renown with some other person or thing.

n₃ Obs ヲノ語源を「ナ」の語の *navis* と「ナ」の語の *navis* に微かに辿りつくと推測しながら

A small stream ヲノ

更には New Standard Dictionary of English Dictionary の中

① One who is in pursuit of the same object as another; One striving to reach or obtain something that another is to obtain and that only one can possess: a competitor

② One striving to equal or exceed another; One equalling or approaching closely to another in any respect (Obs) One having a right or duty in an alternation with another; a partner

と、①では a competitor、②では a partner と明示している。おそらくひろ氏は研究社のもことによって考察をすすめたのであろう。OED の示す n₂ の原義の「対岸に住む人」が水の利用をめぐる争いまたは和解し、協力してきた歴史がこの語にも反映しているのではないかと思われるので上流・下流を眺めるとするには問題が残る。(この語義については和田教授から貴重な御教示を頂きました)

ひろ さちや著 前掲書 五一頁

③ ひろ さちや著 前掲書 五一頁

④ 『續日本後紀』 承和二年 (八三五) 三月二十五日の条 (国史大系 4 『續日本後紀』 卷四 三八―三九頁)

⑤ 『御遺告』 (二十五箇條) (『弘法大師傳全集』 第一巻 一〇―一二頁所収)

⑥ 上山春平著『空海』六三頁 (上山氏はこの著作で空海の伝記の二つの系統へ一つは『續日本後紀』の系統、他は宗門の支持する『御遺告』の系統に分け、その差異を (1) 出身、(2) 学問、(3) 求聞持、(4) 三教指歸、(5) 書法、(6) 得度、(7) 入唐、(8) 開宗、(9) 入山、(10) 逝去の十項目について詳細な吟味をした上で、『御遺告』系統の伝記は偽作であると断定している。また、渡邊照宏・宮坂宥勝著『沙門空海』も宗門関係者の著書でありながら、『御遺告』の内容については信憑性を疑問視し、空海の真筆に依拠して空海像を浮き彫りにしている。)

⑦ 空海著『三教指歸』八五頁 (岩波古典文学大系 71 『三教指歸 性靈集』 所収)

⑧ 空海著『文鏡秘府論』(『弘法大師全集』 増補第三版 第二巻 九―十頁所収)

⑨ 高木神元著『空海』四三―四四頁および同書一三―一五頁参照 (渡邊照宏・宮坂宥勝著『沙門空海』三四頁および上山春平著 前掲書 八三―八

四頁参照)

- ⑩ 空海著『性靈集』巻第四「辞少僧都表」二五一頁(岩波古典文学大系71 所収)
- ⑪ 渡邊照宏・宮坂宥勝著「解説」一四頁(岩波古典文学大系71 所収)
- ⑫ 渡邊照宏・宮坂宥勝著 前掲「解説」一三頁
- ⑬ 空海著『三教指歸』一四五―一四七頁(岩波古典文学大系71「三教指歸 性靈集」所収)
- 『三教指歸』はその登場人物が、儒教の兎角公、その甥にあたる蛭牙公子、儒教の龜毛先生、道教の虛亡穩士、佛教の假名乞食の五人であり、この五人の対話様式の戯曲の形をとって展開される。兎角公邸の客である龜毛先生は兎角公に請われて蛭牙の非行を諫める意味で、儒教を説く。それは忠孝、立身出世などの世間道德である。この教えによって蛭牙は改悛する。次に、その場で愚を装っていた虚亡穩士が口を開いて老莊の教えを説く。それは儒教的な道德を一応は認しながらも、超俗の道、ことに長生久存、昇天の神術を明らかにし、これをもって儒教より勝れたり主張する。それに引き続いて、假名乞食の風貌・行状が紹介され、假名乞食は儒教による世俗の名利、道教による脱俗も共に否定し、三世因果の理法を明らかにして衆生に働きかける実践活動こそ真実の忠孝であると主張する。そのために、「無常の賦」「受報の詞」「生死海の賦」などを唱えて六道輪廻の現実相を教え、さらに五戒十善・六度・八正道・七覺文・四念処・四弘誓願など、佛教の基本的な教えを述べ、佛教を讃嘆する。ここに居合わせた龜毛らは假名乞食の所説に心服したので、假名乞食は三教の趣旨を示す「十韻の詩」を作って詠じるという内容であり(岩波古典文学大系71「三教指歸 性靈集」所収の渡邊照宏・宮坂宥勝著「解説」二〇頁)、假名乞食は空海自身、蛭牙公子は(空海の)「一の表甥」、龜毛先生は阿刀大足であり、兎角公邸は佐伯氏の邸宅であろうとされているが、龜毛先生と蛭牙公子の二人の名前の着想は、『般若経』の聖者や中觀の哲学者が概念と実在の乖離を示すために、外延のない、つまり成員をもたない、概念を喩えとして挙げた兎の角、龜の毛、虚空に咲く花などの例に因むものであり、それらは主辞として対立した二つの述辞をともし否定する龜毛や蛭牙を借用したものと推察できる。(梶山雄一著「瞑想と哲学」梶山雄一・上山春平著『空の論理』(角川書店「仏教の思想」3)所収 一四四頁。この二人(龜毛先生と蛭牙公子)の名前に示されるように空海の儒教への批判は実体的ない理念のみを求めるものであると、極めて厳しいものであった。
- ⑭ 福永光司著『老子 下』三八頁(朝日新聞社 中国古典選11 所収)
- ⑮ 福永光司著 前掲書 四三頁
- ⑯ 上山春平著 前掲書 一五七頁 高木神元著 前掲書 四三頁参照(この官符は、幕末の博物学者野里梅園(『毛利元壽』の『梅園奇賞』(文政十一年刊)に収録されている)
- ⑰ 空海著『性靈集』巻第七「奉為四恩造二部曼荼羅願文」三二一頁(岩波古典文学大系71)
- ⑱ 空海著『性靈集』巻第五「為大使與福州觀察使書」二六七頁
- ⑲ 空海著『性靈集』巻第五「與福州觀察使入京啓」二七一頁
- ⑳ 空海著『性靈集』巻第五「為大使與福州觀察使書」二六九―二七一頁
- ㉑ 空海著『性靈集』巻第七「為故藤中納言奉造十七尊像願文」三二三頁

- 22 空海著『性靈集』巻第四「劉庭芝集奉獻表」二二九頁
- 23 高木神元著 前掲書 九一頁
- 24 同上
- 25 『弘法大師全集』第一巻 一〇〇―一〇一頁（渡邊照宏・宮坂宥勝著 前掲書 二四三頁より孫引）
- 26 空海著『性靈集』巻第五「與本國使請共歸啓」二七七―二七九頁
- 27 空海著『性靈集』巻第五「與越州節度使求内外經書啓」二七三―二七七頁
- 28 『性靈集』巻第四に記された空海が嵯峨天皇および皇室・朝廷に献上したものは、「劉希夷集獻納表」（弘仁二年六月廿七日）、「奉獻雜書述状」（弘仁二年八月）、「奉獻筆表」（弘仁三年六月七日）、「獻雜文表」（弘仁二年七月に十九日）、「書劉庭芝集奉獻表」（弘仁二年）であり、いずれも唐から請來したものである。
- 29 渡邊照宏・宮坂宥勝著『沙門空海』一〇一頁（なお乙訓寺別当解任は翌弘仁三年十月二十九日である）
- 30 二人の手紙のやりとりについては、高木神元著『最澄と空海の手紙』に詳しい。
- 31 空海著『性靈集』巻第九「於紀伊國伊都郡高野峯被請乞入定處表」二九七―二九九頁
- 32 同上
- 33 空海著『性靈集』補闕抄 巻第十「綜藝種智院式 并序」四二―四三頁（唐代には必ずしも儒・佛・道の三教が共に国家の庇護の下にあったとはいえない。道教や佛教が敵視されたことも、儒教が軽視されたこともあった（蠣波護著『隋唐の仏教と国家』参照）
- 34 『續日本紀』巻十二（天平七年四月辛亥の條）『国史大系』2 『續日本紀』一二七頁
- 35 宮田俊彦著『吉備真備』四〇―四一頁
- 36 『續日本紀』巻二十六（天応元年六月辛亥の條）『国史大系』2 『續日本紀』四七四頁
- 37 佐藤誠著『日本教育史』一 五一頁（『日本後紀』巻第八の「桓武天皇紀」延暦十八年二月二十一日の條）に「（和氣清麻呂）大学南邊以私宅置弘文院、藏内外經書數千卷、墾田四十町永充學料、以終父志焉。」との記述がある。）
- 38 『朝野群載』の長保四年五月二十七日大江匡衡「請被給穀倉院學問料繼六代業男蔭孫無位能公狀」の條に「菅原大江兩氏建立文章院。分別東西曹司、為其門徒習儒學、著氏姓者、濟々于今不絶因斯此兩家之傳、門業不論才不才、不拘年齒。……」とある。国民精神文化研究所編『日本教育史資料書』第一輯 一五九頁所収）
- 39 佐藤誠著 前掲書 五一頁（『續日本後紀』巻第五「仁明天皇紀 承和三年五月二十六日の條」および『類聚三代格』巻第十二「貞觀十四年十二月十七日の太政官符『勸學院事』の一條」に「故左大臣贈正一位藤原朝臣冬嗣、情深謙挹、義貴能施、遂乃折割食封千戸、貯收於施藥觀學兩院、藤原氏諸親絶乏之者、同氏子弟勸學之輩、量班與之、但封邑之賞、人没則已、所以買置田業、散在諸國、創業之始、壤利所輸、不須督促、全入院廩、……」とある。また『類聚三代格』巻第十二「貞觀十四年十二月十七日の太政官符『觀學院事』の一條」に「觀學院一區 在左京三條一坊 右得彼院解稱件院、是贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣去弘仁十二年所建立也。即為大學寮南曹、但不被管寮家。創業年深内外聞遠加以去承和三年十月

④〇 五日田園所輪牧宰可催送之狀騰勅符頒下諸国、而所在之職未有承知、恐千祀之後事不分明、望請、下知京職以為後驗、謹請官裁者、右大臣（『藤原基經』宜依請。」国民精神文化研究所編 前掲書 第一輯 一六二～一六四頁所収）
空海著『性靈集』補闕抄 卷第十「綜藝種智陰式 并序」四二五～四二七頁（日本古典文學大系71 所収）